お知らせ

今度は東京での開催が決定!
筑波大学主催の「ミュージアムITセミナー」

今回、表紙でご紹介した香川大学博物館の「ミュージアムITセミナー」。弊社もお手伝いしたのですが、お陰様でご好評をいただき、成功裏に終わりました。

これを受けて、来年1月、今度は筑波大学の主催による東京でのセミナー開催が決定しました。場所は筑波大学東京キャンパス文京校舎、日程は平成29年1月30日(月)を予定しております。

前回同様、弊社も一部をお手伝いする方向で準備を進めております。詳細は決定次第お知らせいたしますので、どうぞお楽しみに。

東日本大震災で水損した資料の復旧作業の実録
被災した写真資料の対応マニュアル 刊行のお知らせ

さる5月20日、「被災写真救済の手引き ～津波・洪水などで水損した写真への対応マニュアル～」(国書刊行会・刊)という書籍が刊行されました。著者は「陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト(以下・RD3プロジェクト)」で、弊社代表が実行委員長を務めておりますボランティア団体です。

弊社も企画面で協力いたしておりますRD3プロジェクトは、東日本大震災によって被災した陸前高田市立博物館などの資料のうち、主に写真資料のクリーニング・デジタル化などを目的に発足しました。海水損した写真の対処は難航を極めましたが、作業が完了したことを受けて、活動を通じて確立したノウハウを取りまとめた次第です。

実際にどのような活動を行ったのか、実作業にあたってはどのような問題に直面したのか、それをどう解決したのか。被災した写真類の救済方法は、前例のないものであったため、すべてが手探りで進行しました。こうした一連のプロセスと方法論は、今後の文化財の保護の上でも参考としていただけるものと考え、作業の段取りや内容を細かく書き残すことにしたものです。

自治体関係者、博物館関係者の皆様方におかれましては、今後への備えの意味も含め、貴重な資料としてお読みいただける内容となっております。ぜひ手にお取りくださいますよう、ご案内いたします。

被災写真救済の手引き
津波・洪水などで水損した
写真への対応マニュアル
RD3プロジェクト 著

定価:1,404円(本体価格1,300円)
発売日:平成28年5月20日
判型:A5判
ISBN:978-4-336-05926-0
ページ数:160 頁
Cコード:0000

編・集・後・記

2020年の東京五輪に向けて、日本が大きく変わろうとしています。特にITの分野の進化は加速度的とも言えるもの。自動運転を目指す首都高速などは、まさに新時代の到来の象徴的のようにも思えます。

博物館は本来、ITがなくても成立するもの。でも、それでは各分野が競い合うように情報を発信するデジタル時代の中で埋没し、人々にその魅力がますます伝えにくくなります。ITの進化の流れから取り残されないようにするには、相当な知恵と努力が必要なのではないでしょうか。

www.facebook.com/wasedasys
早稲田システム開発株式会社

今回の記事をピックアップしていたら、くしくも「ミュージアムITの進化」を示唆するものばかりということに気づきました。弊社が提供中のサービスもまた、こうした「新時代性」が強く反映されたものとなりそうです。

しかしどれだけ技術やサービスは変わっても、「頑張れ、ミュージアム。」という基本姿勢は変わりません。むしろ、「博物館を応援するチカラ」を少しでも引き上げて、我が国の発展に貢献できる会社でありたい。そんな思いがどんどんと強まっていく毎日です。

MAPPS press

News Letter from MAPPS
2016.10
No.9

頑張れ、ミュージアム。

waseda System Development

発行元:早稲田システム開発 株式会社
東京都新宿区新宿5丁目3番15号
TEL.03-6457-8585 FAX.03-3351-1660
www.waseda.co.jp/

CONTENTS

参加レポート
ミュージアムITセミナー2016 in 香川
平成28年6月24日 香川大学

ミュージアムIT屋さん、現場を往く!
住民参加が力を生む
デジタルアーカイブの新しいカタチ

ミュージアムITトピック
アイデアがどんどん広がる!
「ポケット学芸員」の効果的な活用

新機能プレビュー
I.B.MUSEUM SaaSの最新追加機能
／特報! 次期実装予定アプリ

お知らせ
刊行情報:被災した写真資料の対応マニュアル

参加レポート

博物館ITに特化した
貴重なセミナーが実現

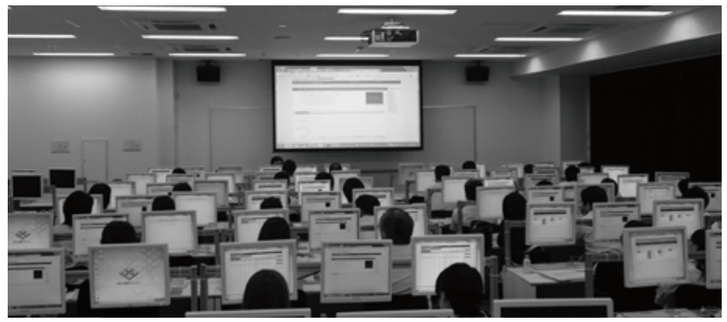
ミュージアムITセミナー2016 in 香川
2016年6月24日(金)
主催／香川大学博物館 会場／香川大学

写真は、香川大学博物館主催の「ミュージアムITセミナー2016 in 香川」でのひとコマです。大雨となった6月24日、香川大学で開催されたのですが、県内はもちろん九州からのご参加もあり、当日は40名以上を超える方々が集結。会場内は大変な熱気に包まれました。

弊社は、ミュージアムITの最新事情のレポート、博物館クラウドの体験会をお手伝いさせていただきました。大切な時間を使ってきていただいた方にご満足いただけるお話ができたかどうか、少し心配ではありますが、皆さんのお顔を見る限り、話は上手くなくても思いは伝わったのではないかと思いました。

博物館のIT活用に向けて、これからもお役に立てそうなことはどんどんトライしていきたいと考えております。

香川大学のご関係の皆様、ご来場くださった皆様、ありがとうございました!



ミュージアムＩＴ屋さん、現場を往く！

事例研究

住民参加が力を生む デジタルアーカイブの新しいカタチ

一般の企業に比べると少しおとなしくはあるものの、時代の流れの中でさまざまな試みにチャレンジしている博物館業界。もちろんITにまつわる話題も活発ですが、最近では「先端技術を学んで地域活性化に活かす」という視点での勉強会などが活発に開かれるようになりました。

弊社では、各地で進む取り組みにも積極的に参加しています。そこで今回は、弊社スタッフが実際に出かけたデジタルアーカイブに対する3つの取り組みについてご紹介しましょう。

1 夢を乗せ、思いを込めたデータベース —— 八戸三社大祭デジタルアーカイブ

「八戸三社大祭」は、300年近い歴史を持つお祭りです。青森と言えば「ねぶた祭り」を思い浮かべる人が多いかと思いますが、情熱と迫力ではこちらも引けを取りません。「三社大祭デジタルアーカイブ」の構築をお手伝いした立場としては、ぜひ本物のお祭りを見ておかねば、ということで行ってきました。

三社大祭の山車は、とにかく豪華絢爛です。7月31日の前夜祭では、街中に設置された山車がライトアップされ、まばゆいくらいの華やかさでした。翌日の「お通り」では、神明宮・霾(おがみ)神社・新羅神社の三神社の神輿の行列と各町内で製作した山車が市内を練り歩きます。山車は全部で27台。武者物、民話、歌舞伎、縁起物などを題材に、この日のために数か月も前から各町内で準備してきたものです。「となり町に負けてなるものか」と沿道の地元の人の声援に力が入るのも納得です。

私の席の周りには、「吹上」地区の方々が多かったようです。山車が近づいてくると「ふきあげー！」と大声援が聞こえ、圧倒されました。

ちなみに、今年は118万人もの人出だったとか。前夜祭とお通りの2日間の見学は、本当によい経験になりました。

これに先立つこと約半年。「八戸三社大祭デジタルアーカイブ」というウェブサイトがオープンしました。写真を中心に、三社大祭にまつわる資料12,000件が公開されています。

時代から、山車組から、行列絵図からといったさまざまな検索方法がありますが、試しに「山車組から検索」で「吹上山車組」を検索してみると、昭和5年の「優勝旗」や昭和10年の山車の雄姿が出てきます。これこそが、地元の歴史の誇り。デジタルアーカイブの本質を見たような気がします。

また、今年2月21日には、「八戸三社大祭アーカイブシステム公開に向けて　地域活性と三社大祭」というシンポジウムが開かれました。データベースシステムのお披露目にしては珍しいくらいほどの熱気だったのですが、半年後に実際のお祭りを体験してみると、その理由がよく分かりました。人生の一部を捧げるほどの思いを抱えて参加される方、先祖代々山車づくりに関わっておられる方。こうした皆さんが、日本が誇る伝統を守り続けておられるのです。データベースは、その記録を担うツールですので、熱意をお持ちになるのも当然です。

八戸三社大祭は、ユネスコの無形文化遺産への登録を目指しています。私たちも、できる限り応援していきたいものです。

勇壮なお祭りに、それに負けないほど(?)の熱気のシンポジウム。でき上がったデータベースも、検索方法が充実しているだけでなく、とても丁寧なつくり。これなら地域の皆さんにもお喜びいただけることでしょう。

八戸三社大祭デジタルアーカイブ
www.hachinohe-bunkaisan.jp/sansha/

2 地元の歴史文化への誇りを原動力に活動を開始 —— 佐賀県多久市「龍孫の郷 散歩道整備事業ワークショップ」

佐賀県多久市には、多久聖廟という史跡があります。多久聖廟は、宝永5年(1708年)、多久茂文が孔子像を安置し、領民に「敬」の心を培わせるために建てた孔子廟。足利学校(栃木県)、閑谷学校(岡山県)に次ぐ古い聖廟とされています。

多久市には、これ以外にも史跡がたくさんあります。「【龍孫の郷】肥前多久・聖学華開き文教の風薫る城下散歩道」が「新日本歩く道紀行100選」シリーズに選ばれています。そしてこのほど、これらのコースを弊社のスマートフォン向けアプリ「ポケット学芸員」で案内することになり、地元の皆さんへの説明会がワークショップ形式で開かれました。

この事業は、市の観光商工課や観光協会が中心となって進めています。今回は、生涯学習課に所属する資料館の学芸員が説明の壇上に立ち、地域の歴史の「深いところ」について講演されました。参加しているのは、もちろん住民の皆さんです。我が街の歴史や文化に誇りを持って、それを多くの人に知ってもらおう……そんな熱気に溢れていました。

ご高齢の方が大半を占めるとあって、馴染みにくいのではないかと少し心配しましたが、杞憂でした。3人に1人くらいの割合でスマホをお持ちになっていたのです。アプリを使った地元の写真を見ては、会場のあちこちから感嘆の声が上がるなど、「大盛り上がり」と言ってよい雰囲気。むしろ、こちらの方が圧倒されるような思いでした。

今後は、このアプリに「まちの名所」をどんどん登録し、地元情報を発信していこう。そんな姿勢を共有できたワークショップ。多久市は魅力たっぷりの街ですので、ぜひ知名度向上に役立てていただけるよう願っています。

皆さん、とにかく熱心！ これならすぐに難なく使いこなせるようになっていただけるでしょう。

3 県民参加で気運を盛り上げよう ―― 博物館・美術館のデジタルアーカイブを考える講演会

9月24日、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館において、博物館・美術館のデジタルアーカイブを考える講演会「文化財とアーカイブ　―三次元デジタルデータの可能性を探る―」というイベントが開催されました。この日は、3人の講師のうちの一人としての参加でしたが、実は、むしろほかのお二方のお話を聞くことを楽しみにしていました。期待通り、実に興味深いお話が伺えて、大変勉強になりました。

特に印象に残ったのは、「三次元計測装置」の実演です。ドイツGOM社製の「ATOS」というシステムを使って、地元・一乗谷で出土した鏡を計測し、その3Dデータを作成するまでの実際を間近に見ることができました。3D全盛の世の中ですが、その制作過程をつぶさに見るチャンスは多くないだけに、個人的にも大変貴重な機会となりました。

この計測装置は非常に高額なもので、「1千万円は下らない」とのこと。それだけに、計測速度はかなり速く、しかも高精度。これから技術革新が進んでコストダウンされ、一般の博物館に普及したら……と想像して、興奮せずにはいられませんでした。

会場では、実際に3Dプリンタで制作されたレプリカも展示されていました。「触って形状を確認してください」と添えられていたのですが、手に取ると微妙な質感が伝わってきます。どんな活用先が生まれるのか、これからが楽しみな技術です。

参加者はもちろん学芸員が中心ですが、一般のご参加もかなり多かったように感じました。質疑応答ではたくさんの質問が飛び交って、活気に満ちた空気に。多くの方々の期待感がひしひしと伝わるイベントでした。

3D時代の本格化を思い知らされた今回の講演会。博物館とは相性バッチリの技術です。

いずれも盛況だった3つの取り組み。
大切なのは、使う方々に喜んでいただけること。

博物館資料データのデジタルアーカイブ化の波は、今後、確実に広がるはずです。しかしながら、そこに行き着くまでには、さまざまな障壁があることも事実です。それは、学芸員や館職員の皆様にとっては、大きな難題です。

これまで何度か行われた全国規模のアンケート調査では、この点に関するミュージアムの現場からの回答が寄せられています。これを分析してみると、「予算不足」「人員不足」の2点が群を抜いています。最大の問題は、この状態が10年以上も続いており、改善の兆しが見られないことです。

「人員不足」は、すなわち「人件費不足」と言い換えることができますので、結局は「予算が付かないから進まない」ということがすべて。これを解決するには、国や自治体の支援が不可欠です。では、なぜ予算が付かないのか。これも簡単で、支援する側も予算不足にあえいでいるからです。

とすれば、とても越えられそうにない高い壁のように感じます。しかし、今回ご紹介した各事例には、難攻不落の「予算の壁」を突破するヒントがあるように思います。それは、地域住民を中心とする多くの人々が「デジタルアーカイブの実施の成果」を明確に享受できる方法を考えて、明確に提示することです。

方法はあります。管理システムを導入済みであれば、まずは予算のかからない範囲でアーカイブ化を始め、少しだけでよいので公開してみること。その情報が住民の皆さんに届き、「これはいい」「これは使える」という反応を得ることができれば、やがてその効果を無視できなくなるはず。つまり、さらなるデジタルアーカイブ化推進のための予算をもたらしてくれる基盤となるのは、館と利用者の熱気なのです。

「鶏と卵」のような関係になることは否めません。余力がない中でデジタルアーカイブの準備を行うのは大変な作業です。それでも、このIT時代においては、博物館の存在理由を大きくアピールする要素となり得ます。

現在の日本は、海外からの旅行客も増え続けています。彼らをお迎えするには、地域住民が「自分の街を知っている」ことこそが前提。日本政府は、「日本を世界に紹介する」ことに注力していますので、文化財の重要性を再認識する気運は高まっていると言ってよいでしょう。

少ない点数、情報量であっても、まず公開すること。ご利用になる方々に喜んでいただける仕組みを作ること。これが「次の時代の博物館」への第一歩となるのではないでしょうか。

ミュージアムITトピック

アイデアがどんどん広がる！「ポケット学芸員」の効果的な活用

I.B.MUSEUM SaaSの追加機能である展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」が好調です。お陰様で30館近いミュージアムに導入いただいておりますが、最近はより工夫を凝らした活用例も増えてきました。

ここでは、5館の例をご紹介いたします。ぜひご参考に。

既存の音声ガイドと上手に共存！　～ふくやま文学館～

ふくやま文学館では、常設展示室で従来から導入されている音声ガイドをそのまま継続し、「ポケット学芸員」と併用しておられます。企画展示室では、ポケット学芸員で解説情報が配信されています。

常設展示室の音声ガイドは、専用端末を借りれば聞くことができます。案内看板の番号を入力するのですが、実は、これと同じ音声コンテンツをポケット学芸員でも楽しめるようになっています。来館者の混乱を未然に防ぐよう、幅を持たせた運用スタイルを取っているわけですね。

原則として企画展示室用のポケット学芸員は、現在は音声ではなく、画像と文字が使われています。アプリの説明パネルでは、使用方法が簡潔に案内されていて、番号パネルもとても分かりやすい仕上がり。「スマホユーザーであれば、誰でも簡単に使える」ことがひと目で理解できるよう配慮されています。

ちなみに、シックな内装に合わせた案内看板のデザインもポイントのひとつ。館内展示のアクセントにもなり得ることがよく分かる好事例と言えるでしょう。

写真家ご本人が作品を解説！ ～九州産業大学美術館～

6月4日から7月31日まで開催されていた「ハービー・山口写真展『ありふれた日常は奇跡の一瞬だった．．．。』」で、「ポケット学芸員」で作家自身の声によるガイドが配信されました。

写真家・エッセイストのハービー・山口氏は、九州産業大学芸術学部の客員教授を務めておられます。展覧会では、氏が20歳だった1970年から今年・2016年までの写真約70点を展示。日常風景から学生デモ、パレスチナや渋谷の若者たち、そしてU2やボーイ・ジョージ、福山雅治といった有名人のショットまで、多彩な作品が展示されていました。

そのうちの19点で、ポケット学芸員による音声ガイドを提供。個人的に特に印象に残ったのは、東日本大震災の被災地で若い漁師さんたちを撮影した「俺たち絶対負けないぜ！」というタイトルの1枚。ホントに素敵な、でも心に重く響く写真なのですが、これを撮影するにあたっての写真家としての葛藤が、ご本人の声でスマホから流れてきます。

「他人の不幸にカメラを向けることの怖さ、辛さ」。ご本人の解説を聴くと、撮る側、撮られる側の心がしっかりと通じ合っていたことがよく分かりました。作品を見て感動して、ガイドを聴いてさらに作品の奥深くへと誘われる。これが「作品解説」の効果なんだ…と、改めて感じました。

この試みは、来館者への大きなサービスとなるだけでなく、作品とともに作家自身の肉声を保存するという効果も同時に実現するものです。ミュージアムの利用者の一人としても「ぜひ広がって欲しい」と思わずにはいられない秀逸な活用法でした。

作品を手がけたご本人の言葉でコメントを聞ける……これは来館者の方々の満足度も高まりそうなアイデアです。

流行の「YouTube」で展覧会を紹介！ ～福生市郷土資料室～

ポケット学芸員には、実は無料動画サイト「YouTube」にアップロードされた動画を配信できる機能があることをご存じでしょうか。福生市郷土資料室では、企画展示「鳥の暮らしと多様性（7月25日まで）」「平和のための戦争資料展（9月25日まで）」で、この機能を活用した紹介動画を配信されました。

スマートフォンで動画を見るというスタイルは、すでに当たり前のものとなっています。ディスプレイの表示品質の向上もさることながら、配信される動画も高精細なものが増えました。また、スマホの動画撮影機能のクオリティが上がったため、高額なカメラがなくても撮れるようになるなど、進化は留まるところを知りません。

そんな時代だけに、「展示室に入る前にガイドを見て全体像をつかむ」という使い方も、一般的になるかも。これも、可能性を感じる活用法ですね。

静かな館内は保ったまま「鳥の鳴り」を楽しむ！ ～岩手県立博物館～

音声ガイドの「音声」は、解説ナレーションとは限りません。音でありさえすれば、どんなものでも配信できる。これも、ポケット学芸員の利点のひとつです。

岩手県立博物館では、「これが欲しかった！」というアイデアを実現されました。鳥の剥製の展示に合わせて、その鳴き声の音声を配信されたのです。鳥は「クマゲラ」なのですが、森の中の静寂を破るように鮮明に聞こえるその声は、剥製を見ながら聞くとリアリティがアップ。さらにイキイキとした展示となっていました。

鳥や動物の鳴き声は、これまでにも多数の博物館で配信されてきました。ですが、固定のスピーカーからの音では、周囲の環境音に紛れてしまい、なかなか聴き取りづらかったというのが本音でしょう。イヤホンで聞くと、生々しさも伝わって、臨場感も迫力も倍増。博物館体験がグッと広がりそうな事例です。

「学芸員のひとこと」で親近感をアップ！ ～埼玉県立近代美術館～

7月16日から8月31日まで、1階展示室内でポケット学芸員の試験運用を実施。オフィシャルな解説に加え、「学芸員のひとこと」という親しみやすい解説情報も添えるというアイデアも盛り込まれました。

これまでは、展示室内でスマートフォンや携帯電話の使用を禁止しておられました。今回の試験運用は、使用目的を特定しての解禁。限定的ではありますが、大きな方向転換を決断されたことになります。

時間を確認したり、メモを取ったり、ネットで関連情報を探したり……といった日常的な行動を支えるスマホ。欧米だけでなく、日本でも利用を許可する館が増えています。写真撮影や通話、SNSへの投稿などの禁止行為を行わない限りOKとした今回の実施では、特に目立ったトラブルは発生しなかったとか。さまざまな問題が指摘される美術館でのスマホ利用ですが、意外と杞憂かも……と感じる事例でした。

I.B.MUSEUM SaaS　新機能情報

時代に合わせた使い勝手が続々！ I.B.MUSEUM SaaSの最新追加機能

スマートフォン用アプリ「ポケット学芸員」がご注目をいただいておりますが、こちらもぜひお忘れなく……というわけで、I.B.MUSEUM SaaS「本体」の方も大きな進化を遂げています。

リリース以降、すでに多数の機能追加を行ってきましたが、バージョンアップのスピードはいまも衰えていません。今回は、最近実装された最新機能をいくつかご紹介しましょう。

I.B.MUSEUM SaaS 新機能 ❶ レスポンシブWebデザイン

「レスポンシブWebデザイン」とは、PCやタブレット、スマートフォンなど、異なる画面サイズのデバイスで閲覧しても、それぞれのサイズに合わせたレイアウトに自動的に調整するデザインのことを指します。

総務省「平成26年通信利用動向調査」によれば、「インターネットをどの端末で利用したか」という問いに対して、「自宅のパソコン」が53.5%、次いでスマートフォンが47.1%という回答結果となったとか。すでにデータを公開しておられる館の場合、それを「半数近い人がスマートフォンで見ている」ことになりますので、そろそろ対応を考えたいところです。

ということで実装したのが、今回の機能。I.B.MUSEUM SaaSのデータ公開ページを作成する際、レスポンシブWebデザインが選択できるようになりました。

使い方はとても簡単です。インターネット公開設定画面の「基本設定・デザイン」にある「レスポンシブデザイン」のプルダウンメニューで「対応する」を選び(❶)、上部の「設定保存・差分転送」ボタンをクリック(❷)するだけ。たったこれだけで、レスポンシブWebデザインへの変更が完了しますので、ぜひご活用を。

小さなスマホ画面でもグッと見やすくなります

I.B.MUSEUM SaaS 新機能 ❷ YouTube動画の登録と公開

「ユーチューバー」という言葉をご存じですか？　主に無料動画配信サイト「YouTube」上で活動する人々を指す言葉で、彼らは自分で制作した動画を継続して公開しておられます。中には、数十万、数百万というアクセス数を稼いでいるクリエイターもいるようで……。

こうした人々の登場に象徴されるように、いまや映像はテレビ画面内や映画館だけで楽しむものではなくなりました。かつては著作権問題もありましたが、最近では独自の映像を配信される方が激増し、ひとつのメディアとして成立するほどの勢いを示しています。最近は、スマホでも簡単に撮影できるようになっているので、今後はさらに身近なものへと成長していくことでしょう。

さて、ミュージアムでも、最近は映像を駆使した情報発信を行う館が出始めています。I.B.MUSEUM SaaSでは、動画ファイルそのものをアップロードすることはできませんが、その代わりに「YouTubeにアップロードした動画を画面上に埋め込む形で登録する」ことができる機能を追加しました。

まずは、YouTubeに館専用の「チャンネル」を作り、撮影した動画をアップロードします。アップが完了すると、その動画専用のIDが作られます(動画のURLのうち、「v=」の後ろが動画IDです)。このIDをI.B.MUSEUM SaaSに登録すれば、埋め込み作業は終了。Webサイトのページに表示されているYouTubeの画面をクリックすれば、動画を閲覧することができます。

YouTubeへのアップロードもとても簡単ですので、ぜひご活用を。

YouTube動画に直接アクセス もちろんスマホでも見られます

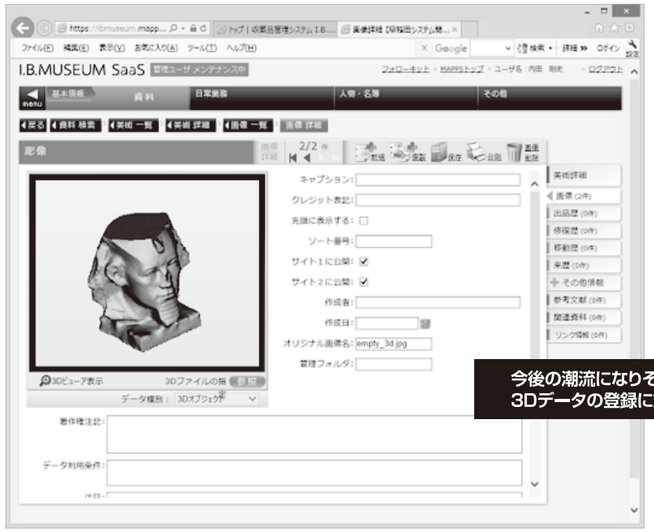
I.B.MUSEUM SaaS 新機能 ❸ 3Dオブジェクトデータの登録と公開

いま、欧米を中心に、博物館資料の3Dデータが話題になることが増えてきました。立体物の紹介を強力にサポートする「Sketchfab」という3Dデータ共有サイトを使って配信している館が多数現れているのです。まずは下記のURLにアクセスし、ぜひご覧になってください。

https://sketchfab.com/

こうした潮流を受けて、I.B.MUSEUM SaaSでも、3Dデータの登録・更改が可能になりました。要領は、画像登録と同じですので、とても簡単です。

ただ、3Dデータが必要となりますので、現状では少し敷居が高いかもしれません。将来に向けての機能とお考えいただけばよいでしょう(登録できるデータ形式は「obj」形式ですので、その他の形式の場合は変換してください)。



今後の潮流になりそうな 3Dデータの登録に対応

そのほか、この1年間でこんな機能が増えました！ ぜひご確認&ご活用を。

- 資料管理にて登録済みの関連資料リンクを公開システムへ表示できるようになりました。
- 旧字異体字・類義語辞書を使用した検索ができるようになりました。
- 検索キーワードをハイライト表示できるようになりました。
- 表示文字サイズの変更機能を追加しました。
- 拡大画像表示ビューアに「ダウンロード」、「印刷」ボタンを追加しました。

I.B.MUSEUM SaaS　新機能プレビュー

特報！ 次期実装予定アプリ

ポケット学芸員の次はコレ！（ほぼ）決定した「次のアプリ」を少しだけご紹介！

I.B.MUSEUM SaaS 次期実装予定アプリ ❶
浮世絵で歩く日本の名所（仮称）

風景画が多い浮世絵は、おおよその「場所」を特定できるものが少なくありません。作品を鑑賞するのも楽しいですが、加えて現地に立ってみれば、味わいの質がさらに深まるはず。ならば、街を歩いている時に、手元のスマートフォンでその場所の作品を見ることができたら、浮世絵への興味も、その場所への愛着も、同時に深まっていくのでは……？

I.B.MUSEUM SaaSのユーザは急速に増えており、お陰様でいよいよ200館に到達しようとしています。ユーザ館の中には浮世絵を所蔵しておられる館がたくさんあります。そして、クラウド型システムであるI.B.MUSEUM SaaSでは、すべてのデータが集中管理されています。つまり、「大量の浮世絵画像が1か所に集まっている」ため、多種多様な浮世絵の情報を発信できる土壌がすでに整っているのです。

「浮世絵で歩く日本の名所」いう仮タイトルを付けた本アプリは、この特徴を活かし、「浮世絵で街歩きができるアプリ」として企画しました。多数の館が「作品を持ち寄る」形で発信できる上に、英文に対応すれば外国人観光客に日本文化の魅力をアピールすることも可能となるはず。というわけで、現在、企画を進行している最中です。

登録は簡単。Googleマップでマウスを合わせると、自動的にその場所の緯度と経度が数値で表示されますので、I.B.MUSEUM SaaSに登録。すると、作品とともに、所蔵館名とホームページへのリンクが掲載されます。

全国の館が力を合わせてPRできるだけでなく、博物館＆学芸員による信頼性の高い情報を配信できるため、ファンにとっては必携のアプリとなるはず。「博物館力」を社会に知らしめる意味でも役立つ企画として、現在、実施に向けて検討作業を進めております。風景画の浮世絵をお持ちの館は、どうぞお楽しみに。

いま立っているその場で
ゆかりのある浮世絵を表示!

I.B.MUSEUM SaaS 次期実装予定アプリ ❷
日本ふるさと写真館（仮称）

I.B.MUSEUM SaaSを「母艦」としたスマホアプリは、さまざまなアイデアを容易に展開できる点が大きな強みでもあります。こちらは、「浮世絵で歩く日本の名所」の地域写真版。

多くの博物館は、地域の写真を多数所蔵しておられます。それらは、上の浮世絵以上に「場所」が特定できるものが多数ありますので、地域の文化や生活の発展の様子を知るにはまさに必須の素材と言えます。

そこで、「日本全国各地域の写真に特化したスマホアプリ」を計画中。街や住宅地、農地や漁場など生活に密着した地域であれば教育ツールとしても活用できますし、史跡や名所、文化財の写真であれば、地図アプリとの連動で観光案内ツールとしても効果を発揮します。

前ページでご紹介した「ポケット学芸員」は、館内案内ツールの役割が中心ですが、博物館クラウドI.B.MUSEUM SaaSは、さらに大きな展開法を秘めています。弊社では、今後、多数のアイデアを実現していく予定です。

目の前に広がる風景を
昔の写真と比較できる

I.B.MUSEUM SaaS 次期実装予定アプリ ❸
桜百景（仮称）

日本人だけでなく、海外の動画や写真投稿サイトなどでも常に大好評の「桜のある風景」。旅行などで日本に来た外国人たちは、こぞってカメラを向けては旅の想い出としてアップロード。まさに日本旅行のハイライトのひとつとして広く認知されていることは、ご存じの通りです。

こうした彼らの反応を「逆輸入」する形で、桜の魅力をさらに再認識する日本人も少なくありません。中には、昔から桜に親しんできた日本の歴史を改めて知り、それが描かれた美術作品などに関心を持つ方もいらっしゃいます。

そこで、ミュージアムが所蔵する桜をモチーフとした作品を広くアピールするために、「桜の作品で街歩きができるアプリ」を着想しました。多数の館の「桜作品」情報が一堂に会する類のないアプリとして告知できれば、旅行好きの方のスマホにインストールされ、館情報に触れていただける機会も増えるはず。そんな想いを込めて企画を進めています。

桜前線の北上とともにスマートフォン片手に旅に出るもよし、描かれた風景と現在の違いを見比べて昔に想いを馳せるもよし。さまざまな楽しみ方を提案することで、「博物館力」の啓蒙につながればと考えています。

「昔の桜の名所」と
現在の姿の比較も

新しいアプリ展開も（ほぼ）決定し、
どんどん進化するI.B.MUSEUM SaaSのNEXT。

業務利用のデータベースシステム／Web公開用システムから、
統合的な情報発信プラットフォームへ
I.B.MUSEUM SaaSは、「博物館力」を「結集する」ことで、
各館の「存在意義」を高めるサポートを行います。

今年4月にリリースした「ポケット学芸員」に加え、左ページの「浮世絵で歩く日本の名所」と「日本ふるさと写真館」、「桜百景」が実現すれば、博物館クラウドI.B.MUSEUM SaaSで利用可能なアプリは4種類に増えることになります。これらは、I.B.MUSEUM SaaSの「機能の一部」という点が大きなポイントとなります。

仮に、ポケット学芸員で館内案内を実施しつつ、浮世絵と写真をテーマとした両アプリに作品・資料を登録したとすると、ご利用のアプリは3つとなりますが、あくまで「機能の一部」ですので、I.B.MUSEUM SaaSの利用料は変わりません。言い換えれば、無料でお使いいただけるということになります。

弊社では、浮世絵／地域写真のように、今後もさまざまなアプリを開発していく予定です。これらは、すべて「機能の一部」ですので、ご利用は自由。自館の方針や所蔵する資料に合ったアプリを、いくつでもご利用いただけるようになります。ひとつひとつのアプリはそれぞれ数百万円の開発コストを要しますが、これらを無料でお使いいただけるのは、博物館クラウドの強みそのものと言えます。

この仕組みのもうひとつのポイントは、「複数の館のコンテンツを束ねることで、互いの館の力を集める」ことが可能な点にあります。ポケット学芸員では、「ひとつのアプリで多数の館のガイドが得られる」という点がご好評をいただいておりますが、これはどちらかと言えば利用者側のメリットとなります。メリットがあるからダウンロードしていただきやすくなるわけです。

一方、浮世絵も地域写真も、多数の館が参加するほどに「アプリ＝コンテンツそのものが充実していく」ことになります。アプリの集客力は、すなわち情報発信力。I.B.MUSEUM SaaSは、多くの館にご参画いただくことで、参加館全体の情報発信力を高める一助となるように企画したものなのです。

ミュージアムには、他では得ることができない情報がある。その「博物館力」は、多くの館が連携するほどに威力を増すことになる……。I.B.MUSEUM SaaSは、情報管理にかかるコストの共有だけでなく、利用者に向けたPRやサービスも共有できるシステムとなります。

それは、もはやデータベースシステムの範疇に留まらず、「プラットフォーム」と言うべき姿。弊社は、博物館の環境改善に務めつつ、同時に業界全体の情報発信にまつわるインフラ構築を目指して参ります。